

平成 27 年 6 月 11 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520345

研究課題名(和文)『フランス・ジャポン』研究 大戦前夜の在仏邦人の出版活動

研究課題名(英文)Comparative Studies of the periodical "France-Japon"

研究代表者

渋谷 豊 (SHIBUYA, Yutaka)

信州大学・学術研究院人文科学系・准教授

研究者番号：70386580

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：日本とフランスの文学・文化の交流の実態を解明するために、本研究に置いては兩次大戦間に松尾邦之助を中心とする日本人がパリで刊行した雑誌(『フランス・ジャポン』およびそれと関わりの深い雑誌『ルヴュ・フランコ・ニッポンヌ』)を取り上げ、この雑誌を取り巻くコンテキストを明らかにしながら、日本文化・日本文学の紹介の仕方の特色を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The aim of my research was to examine the nature of the creative relationship between Japanese literature and French literature. I chose to focus on several periodicals published by Kunio Matso and his Japanese friends in Paris. I attempted to explore the historical context of these periodicals in order to clarify how its editors introduced a wide information of their culture to their readers .

研究分野：比較文学

キーワード：日仏文化交流

1. 研究開始当初の背景

従来の日仏の文化的交流の研究において、フランスの文化が日本にどのように受容されたか、という点はかなり調査・分析が進んでいたが、逆に日本の文化がフランスでどのように受容されたかについては、十分に考察されてこなかった。とりわけ、フランスに滞在中の日本人が行った出版活動については研究が手薄であった。ただし、近年ようやく、特に両次大戦間の在仏邦人の活動に光が当てられるようになりつつある。

このような状況を踏まえ、近代日本人のフランス体験に関する従来の知見を更新することを目指して、研究代表者は両大戦間にフランスで日本人が刊行したフランス人向けの雑誌について調査・分析を行ってきた。その最初のまとまった成果は、松尾邦之助を中心とする日本人グループが1920年代にパリで刊行した雑誌 *Revue franco-nipponne* (以下、『日仏評論』と表記) に関する論考である。(渋谷豊「日仏評論について」早稲田大学比較文学研究室編『比較文学年誌』第四一号。加筆修正の上、松尾邦之助『巴里物語[2010復刻版]』社会評論社、2010年、に「巻末資料論文」として再録)。この『日仏評論』の後継誌に相当するのが、やはり松尾邦之助らがパリで1930年代に刊行した *France-Japon* (以下、『フランス・ジャポン』と表記) である。

現在(2015年)は、『フランス・ジャポン』はそのバックナンバーが日本で復刊され(ゆまに書房)、『フランス・ジャポン』に関する優れた研究も発表なされるようになってきている。しかしながら、本研究の開始当初には、まだその実態はほとんど解明されておらず、これからの研究の発展・深化が待たれていた。

2. 研究の目的

日仏の文化交流、特に日本人のフランス体験に関する従来の知見を更新するために、両次大戦間のフランスで日本人が刊行した仏語雑誌について調査・分析し、その内容及びフランスに与えた影響を明らかにする。具体的に取り上げるのは『フランス・ジャポン』誌であり、またそれとかわりの深い『日仏評論』誌である。

『フランス・ジャポン』には二つの顔がある。すなわち、一つ目は「対外宣伝誌」、日本の理念について外国人を啓蒙し、親日的な世論を外国に醸成することを目的とした国家宣伝のメディアとしての顔である。事実、この雑誌には、日本国家の理念(例えば「満州国」に関する理念)が色濃く反映している。ただし、それだけではなく、もう一つの顔がある。即ち、日本側の一方的な「宣伝」ではなく、むしろ「文化交流」と呼ぶべき内容も

併せ持っているのである。事実、当時の日本の国策とは(少なくとも直接的には)関わりのない内容のページも多く、また、一五年戦争直前および戦争中の日本の理念に同調しているわけではない、あるいはむしろ批判的なフランス人作家の文章も、同誌にはふんだんに掲載されているのである。このような二つの顔、つまり「対外宣伝誌」としての顔と「日仏文化交流誌」としての顔をこの雑誌は併せ持っている。また、そのことは(程度の差こそあれ)『日仏評論』についても言えることである。このような認識の上に立って、本研究は両誌の二つの顔の特色を詳細かつ具体的に理解するために、以下の点を明らかにすることを目指す。

- ・両誌と日本の対外文化工作機関との関係
- ・両誌とフランスの親日派グループとの関係
- ・両誌に寄稿した文芸作品およびその執筆者(特にフランス人執筆者)の実態
- ・両誌に対するフランス人読者(特に新聞などのメディア)の反応
- ・両誌に掲載された日本文学作品の仏訳の選択基準と翻訳の質
- ・両誌のヴィジュアル面(写真、レイアウト、グラフィックスなど)の特色

以上の点を検討することによって、日仏両国の人や組織と両誌との関係、同誌に対するフランスの評価・反応、同誌の誌面の特色、に対する理解が深まるはずである。

3. 研究の方法

研究対象とする二つの定期刊行物の周囲には様々な思惑が錯綜し、日仏両国の様々な立場の人・組織がうごめいていた。その複雑な相関関係を再現することが両誌の意味を理解するために必須である。両誌をいわばその生態系の中にいったん置き戻すことが必要である、ということである。そのために、実証的な調査を進める。資料収集はフランス国立図書館を主に利用することになるが、『フランス・ジャポン』編集部は国際文化振興会と関わりがあった形跡があるため、国際文化振興会関連の資料を日本国内で可能な限り入手する必要もある。

本研究で特に留意すべきなのは、<相手国側の受け止め方の実態>に関する資料の収集と分析に努めなければならないということ。一般にそれは対外宣伝誌の研究において最も困難とされるものであるが、それをしなければ両国の文化の「交流」ないし「衝突」ないし「すれ違い」の実態は浮かび上がってこないはずである。

4. 研究成果

研究対象とする二つの定期刊行物、とりわけ『フランス・ジャポン』誌が、日本の組織

(特に外務省及び国際文化振興会)と連携していたことが判明し、その実態がかなりな程度解明された。『フランス・ジャポン』誌上における国際文化振興会への言及は多く(総計二二回) 同誌編集部と国際文化振興会が密接に連携していたことを物語る。また、外務省が経済面で支援していたフランスの文化人が頻りに『フランス・ジャポン』誌に寄稿しているところからして(『フランス・ジャポン』誌編集部がそれをどこまで意識していたかは不明であるが) 外務省による対外文化政策と『フランス・ジャポン』誌が無縁であり得たわけではないことも判明した。

また、日本の他の対外宣伝誌を視野に入れながら『フランス・ジャポン』の誌面づくりが行われていることも明らかになった。要するに、『フランス・ジャポン』は、西洋に向けた日本の対外文化政策の全般的な動向と密接に結びついた存在であった、ということである。

他の対外宣伝誌の中で特に重要なのは、日本工房刊『NIPPON』である。『NIPPON』についてはすでに優れたモノグラフィーが刊行されるなど研究がおこなわれているが、『フランス・ジャポン』との連携を視野に入れた研究はこれまでなかったため、本研究は『NIPPON』研究にも新たな可能性を拓いたと言えるはずである。なお、『NIPPON』と比較した場合の『フランス・ジャポン』の大きな特色は二点。一つは日本国内で刊行するのではなく、対外文化工作の対象となる国の内部で刊行されていること。即ち、地の利を生かしているということ。これにより、相手国にネットワークを広げ、相手国の著名な知識人に執筆をしてもらうことが可能になっている。さらに、相手国側で文化的イベント(各種コンクールや展覧会の開催など)を行い、それとタイアップする形で誌面を構成することが可能になっている。もう一つの特色は、複数の言語を用いるのではなく、一つの言葉、即ち、フランス語だけを用いていること(『NIPPON』の場合、原則として、各記事が英仏独西のいずれかで書かれ、それ以外の言語による抄訳が巻末に乗っている)。複数の言語を用いれば、当然、それだけ多くの国の読者を獲得できるし、一方、一つの国にターゲットを絞れば、相手国側の事情や立場に即した日本の国情紹介を行いやすい。『フランス・ジャポン』は後者を選んだのであり、その成果は、特に、独ソ不可侵条約に対する日本の反応を伝える記事などに現れている。

一方、『フランス・ジャポン』編集部が、フランスの政治家・文化人の間で組織された「日本の友の会」と手を結んでいたことも判明し、その実態も部分的に明らかになった。「日本の友の会」とは出版人リュドヴィック・バルテルミーを中心とするもので、その会の機関誌には『フランス・ジャポン』を紹介する記事が載っているし、『フランス・ジャポン』側も「日本の友の会」の紹介にペー

ジを割いている。なお、「日本の友の会」にはフランスの政治家も参加しており(フィリップ・ペタンも参加していたという日本人の証言もある) さらなる解明が望まれる。

さらに、『フランス・ジャポン』にたいするフランスのメディアの反応についても調査が進んだ。「フィガロ」紙、「ル・マタン」紙など発行部数の多い大新聞にも『フランス・ジャポン』およびその編集部の主催する文化イベントへの好意的評言が記載されており、同誌はフランスの世論に多少とも影響を持ち得た存在であったことがあきらかになった。少なからぬ他の日本の対外宣伝誌がフランスではほとんど無視されていた現状を考えると、『フランス・ジャポン』は例外的な「成功」を収めていたということができらるだろう。

『フランス・ジャポン』および『日仏評論』に掲載された文芸作品の検討、特にハイカイ(日本の俳句を模したフランス語の短詩)についての検討も進んだ。フランスの当時の文学がハイカイに何を期待していたのか(ロマン主義的詩法の超克) フランスの文学者がフランス独自の要素をハイカイという様式に盛り込もうとしたとすればそれはどのようなものだったのか(恋愛の心理分析) ハイカイの音律についてはどのような議論があったのか(5・7・5のシラブ数の重視)といった点について、具体的な考察を進めた。

『フランス・ジャポン』および『日仏評論』に参加したフランス人寄稿者としては、特にハイカイ詩人であり、童話作家でもあるルネ・モーブランに注目し、この人物の仕事及びパリの日本社会とのかかわりについて調査を行い、その実態が部分的に明らかになった。また、ルネ・モーブランをいわば仲介として、ジュール・ロマン、シェヌヴィエール、文学グループ「大いなる賭け」のメンバーの仕事とも直接ないし間接的に『日仏評論』『フランス・ジャポン』が繋がっていることが分かり、フランス文学の流れにおける両誌の位置が明らかになってきた。

以上によって、両次大戦間の日仏の文化交流についての理解を深化させることができた。ただし、二つの雑誌のヴィジュアル面(写真、レイアウト、グラフィックスなど)の特色の解明、両誌に掲載された日本文学作品の仏訳の「翻訳の質」の検討、などは十分に行うことができず、今後の課題として残る。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔図書〕(計3件)

松崎碩子・和田桂子・和田博文『両大戦間の日仏文化交流』ゆまに書房 2015年
(渋谷豊『ルヴュ・フランコ・ニッポン』とルネ・モーブラン) pp 91-109)

和田桂子・松崎碩子・和田博文編『満鉄
と日仏文化交流史「フランス・ジャポン」』
ゆまに書房 2012年(渋谷豊「対外宣伝
誌としての『フランス・ジャポン』」
pp89-104)

ほろよいブックス編集部編『酒読み』社
会評論社 2012年(渋谷豊「フランスの
美酒」pp 138-152)

5. 研究組織

(1) 研究代表者

渋谷豊 (SHIBUYA, Yutaka)

信州大学・学術研究院人文科学系・准教

授

研究者番号：70386580